

# メディア研究から考えるデザイン実践の方法論に関する試み

実証的調査研究と創造的実践研究の連携から

Attempt on the methodologies of design practice from the perspective of media studies:

From the collaboration between empirical research and creative practice

鳥海希世子<sup>1)</sup> ジョン・ジューヨン<sup>2)</sup>

Toriumi Kiyoko<sup>1)</sup> Jung Joo-Young<sup>2)</sup>

1) 昭和女子大学 環境デザイン学部 2) 国際基督教大学 教養学部

Abstract : The purpose of this study is to consider the methodology of design practice from the perspective of media studies. More specifically, it is reported and analyzed the trial of collaborating empirical survey research and the creative design practice, both of which implemented online in 2021. The design

Key Word : Media Studies, Design Practice, Methodology

practice was conducted as an online workshop with university students to share and discuss their relationship with local community. After describing concrete results of both approaches it is considered the possibilities of multifaceted research methodology and attitude for practical and critical media studies.

## 1. はじめに：人文社会的な分析・批判知とデザイン実践

従来、社会のありようを客観的に分析し、批判的に考察することを得意としてきた人文・社会科学の分野において、近年、デザインや実践との連携、また、そこにみられる社会への参加や介入といった研究視座が再考されている。それは、2010年代以降、急速な広がりを見せる「デザイン人類学」に留まらない。民俗学や歴史学においても、過去を記録・分析するだけでなく、それらを現在に生きる人びとや暮らしに積極的に活かし、よりよい未来社会へつなげるための研究の姿勢や方法論が問い直され、研究と社会との関係性が議論されている（菅・北条, 2019 など）。

日本におけるメディア研究は1990年代以降、社会学やマス・コミュニケーション研究、ジャーナリズム論の系譜の中で、記号論、カルチュラル・スタディーズ、メディア・リテラシーなどの発展とも重なりあひながら形成された。筆者らは、なかでも2000年代以降、メディア・リテラシーに関する研究に携わってきたことから、放送局や美術館、学校、NPOやサークルといった実践家の人びとと、また一方で、デザインや情報工学の研究者らとの共同研究や実践活動をおこなってきた。

これらの経験をもとに、筆者らは地域コミュニティに根ざした実践的なメディア研究の進化を目指す共同研究プロジェクトを2020年度より展開している<sup>1)</sup>。これは、分析的な人文・社会科学の特徴を活かしながらデザイン活動をおこなう「実践的で批判的なメディア研究の新たな展開に紐づけられる（水越・飯田・劉, 2022）。本稿では、先のプロジェクトの一環として2021年度に実施した実証的な調査研究とデザイン実践研究を連携させた方法論に関する試みの報告と考察をおこなう<sup>2)</sup>。なお、本稿における「デザイン」とは、メディア・リテラシーのこれまでの知見を引き継ぎつつ、「社会や個人にとっての“あたり前”を見直し、そのあり方を意識的に組み替えたり、よりよい方向へと創造的に発展させる活動全般」を指すこととする。

## 2. 目的と方法

本研究の目的は、メディア研究の視点からデザイン実践をめぐる方法論について考察することである。より具体的には、実証的な調査研究と創造的なデザイン実践研究を組み合わせる方法論を試み、考察する。

まず調査研究は、社会調査を専門とするジョンを中心に、2021年5月に宮城・東京・愛知・大阪・広島・福岡の6都府県を対象にオンライン上でのアンケートを実施した。「地域の暮らしとコ

ロナ禍におけるメディア利用」をテーマに、サーベイ会社を通じて計3,002の回答を得た（地域ごとに500サンプルの回収を設定し、年齢は各地域の比率に応じた20~70代とした）。

本調査の設計は、「コミュニケーション・インフラストラクチャー理論（以下、CIT）」（Kim & Ball-Rokeach, 2006）に基づいている。CITは、ロサンゼルスのエスニックコミュニティに対して積み重ねられた量的・質的な社会調査の成果によって構築された理論である（図1）。「住民・コミュニティ組織・ローカルメディア」による3者の関係性をみることによって、人びとの地域に対する帰属意識や社会活動への参加度、共同的なアクションに対する感覚のあり方などを探ることができる。



図1 コミュニケーション・インフラストラクチャー理論（Kim & Ball-Rokeach, 2006）

次にデザイン実践として、2021年11月6日に福岡から東京までの6大学の学生12名を対象に、ZOOMを活用した2時間程のオンラインワークショップ（以下、WS）を実施した。「Locating My “Local” ~私と「地域」とそのあいだ~」と題し、何気ない日常にある若者の「地域との関わり」について話し、共有することを目的に、調査研究の結果をふまえて企画・運営した。

前半では予め準備をお願いした「自分と地域との関わりをあらわす写真」を使った自己紹介を（図2）、後半では3グループに分かれ、「ビフォー&ウィズコロナにおける変化（メディア利用、地域との関わりや意識の変化など）」についてのディスカッションをおこなった。後半の導入として調査研究の結果概要を紹介すると共に、全体を通してグラフィックファシリテーションを取り入れ、前半と後半をつなぐ役割を果たした<sup>3)</sup>。WSの準備から実施まで、全てのやりとりはオンラインであった。



図2 写真を用いた自己紹介のようす (ZOOM画面)

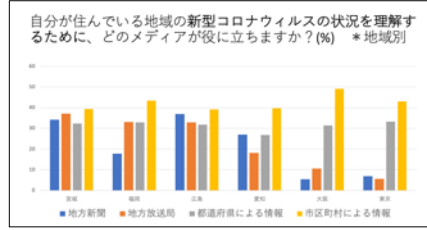


図3 WS で示した調査結果の一部

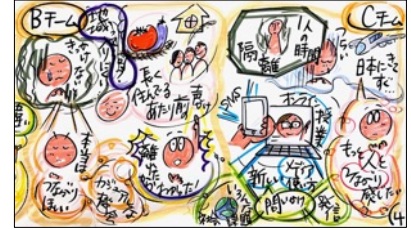


図4 WS 後半のグラフィックの一部 (伊澤佑美氏による)

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 調査研究：「地域」の境、捉え方の曖昧さ

調査結果の分析には、単純集計によるものと重回帰分析によるものがある。時間的制約と学生への提示のしやすさから、本研究では前者の結果をWSの設計と進行に活かした。

単純集計結果からは、地域との関わりやメディア利用に関する6都道府県それぞれの特徴が多く浮かび上がった。例えば、「自分が住んでいる地域の新型コロナウイルスの状況を理解するために、どのメディアが役に立ちますか?」という質問では、図3のような地域によるばらつきが見られた。

その上で筆者らが特に着目したのは、上と同じ質問を年代別に見た場合の結果である。30代から70代では、最も役に立つ情報源には「市区町村による情報」が選ばれ、どの世代においても次の「都道府県による情報」を引き離していた。しかし20代のみ、「都道府県による情報」が最も多く選ばれ、小差で「市区町村による情報」が選ばれていたのである。

このことから筆者らは、特に20代にとっての「地域」の境は曖昧であり、捉え難いものであるのではないかと考えた。一方で20代は、新型コロナウイルスに限らず、地域情報の取得や活動への参加において、他の世代に比べて最もSNSを駆使していることも明らかになった。

これらの結果を受けて、実践研究では、改めて「地域」とは何か、どのように捉えられているかが見えてくることが重要であると考えた。そこで大学生を対象に、日常の中で彼らがどのように「地域」を感じているか・いないか。また、コロナ禍において外出も儘ならず、考えざるを得ない「地域との関わり」がどのように生まれ得るか、その可能性にふれられるようなWSを考案した。

#### 3-2. デザイン実践：コロナ禍における気づきと見えない「地域」

前半の「自分と地域との関わりをあらわす写真」を用いた自己紹介では、参加者思い思いのエピソードが語られた。例えば図2には、民家の一角で営業するたこ焼き屋が写されている。自身も小学生の頃に所属していた地域のソフトボールチームの練習に時折訪れるというこの学生は、帰り道に小学生たちにせがまれて、たこ焼きを買う際に地域との関わりを感じると話した。

このような場所に関わる写真の他、前半では食べ物、動物、家族、自然など多様な「地域との関わりをあらわす写真」が集まり、参加者のトークも滑らかで、大いに盛り上がった。参加者に留学生や海外にルーツのある学生がいたことから、「地域」の範囲が海外まで広がり、異文化体験についての話題にも及んだ。

一方、「ビフォー&ウィズコロナにおける変化」について話した後半では、各参加者がその場で慎重に言葉を選びながら、より率直な意見が出されていたように感じられた(図4)。なかでも特徴的だった2点を挙げる。まず、コロナ禍によって地元と一定の期間離れたからこそ見えてきた「地域」について話す参加者が、複数いたことである。ある学生は、普段はうるさく感じていた近

所との関わりの大切さが、一人の時間が増えたことによって初めて分かったと話した。

次に、とはいえ、「地域」とは一体何かはよく分からない、「地域」は見えないという意見が大半であったことだ。近隣との関わりがほぼない学生はもちろんのこと、ある人にとっても「地域」とは日常的に意識化されていないものであった。ただし、地域と関わりを持ちたくない訳ではなく、ほとんどの参加者が地域との関わりに興味を持っていた。それに対し、ある学生は地元のマルシェに同世代がいないことを思い出し、楽しく、気軽に参加できるイベントや場が若者向けにも可視化されることが、地域との関わりのかっけになり得るのではないかと発言していた。

大上段から「地域」を捉えるのではなく、個々人による日常の“当たり前”を共有し、その違いや共通点に意識的になることから、参加者が多くの発見や気づきを得る様子が見受けられた。

#### 4. おわりに：実践的メディア研究の進化に向けて

本研究では、メディア研究の立場から、デザイン実践を設計・実施・考察するための方法論的な試行をおこなった。本項における「デザイン」の意味に照らし合わせると、「あたり前」を「創造的に発展させる」ところまでは十分に至っていないものの、WSの参加者にも学びが見られ、調査・実践研究の連携はある程度実行することができたと考えている。一方で、それぞれの研究における分析・考察については、今後さらに議論をしながらまとめていく必要があるだろう。社会文化の深層を読み解き、議論してきた人文社会的な知と、未来志向を先導してきた実践的なデザインの知を連環させるメディア研究の進化に向け、今後も研究を進めていく。

#### 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 (JP20K12544) の助成を受けている。

#### 註

- [1] CoMeP プロジェクト (<https://comep.site>) を参照。
- [2] 本研究は執筆者の他、宮田雅子 (愛知淑徳大学)、河キョンジン (國學院大学)、林田真心子 (福岡女学院大学)、土屋祐子 (桃山学院大学) と進めたものである。
- [3] しごと総合研究所の伊澤佑美氏に担当頂いた。

#### 参考文献

- [1] 菅豊・北条勝貴編『パブリック・ヒストリー入門 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版, 2019.
- [2] 水越伸・飯田豊・劉雪雁『新版 メディア論』放送大学教育振興会, pp. 209-264, 2022.
- [3] Y. C. Kim & S. J. Ball-Rokeach, 2006, Civic engagement from a communication infrastructure perspective, *Communication Theory*, 16(2), 173-197.